

古典の日

二十四 敦賀



松尾芭蕉

漸白根が嶽かかれて、比那が嵩あらはる。あさむづの橋を渡りて、玉江の片は穂に出にけり。鶯の関を過て、湯尾峠を越れば燈が城、かへる山に初戸を聞いて、十四日の夕暮、つるがの津に宿をもとむ。

其夜、月殊晴たり。「あすの夜もかくあるべきにや」といへば、「越路のならひ、猶明夜の陰晴はかり難し」と、あるじに酒すゝめられて、けいの明神に夜参す。仲哀天皇の御廟也。社頭神さびて、松の木間に月のもり入たる、おまへの白砂霜を敷るがごとし。「往昔、遊行二世の上人、大願発起の事ありて、みづから草を刈、土石を荷と、泥濘をかハかせて、参詣往来の煩なし。古例今にたえず、神前に真砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申侍る」と、亭主のかたりける。

奥の細道

月清し遊行のもてる砂の上
十五日、亭主の詞にたがはず、雨降。
名月や北国日和定なき



新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉集2『紀行・日記・俳文・連句編』(小学館刊)から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

芭蕉も訪ねた氣比神宮。「社頭神さびて」と感想も記している(福井県敦賀市)

芳賀徹さん とたずねる

おくのほそ道

芭蕉は結局、福井の旧知等裁の家に二晩も泊めてもらった。この風狂の人と語りあって話は尽きることがなかったのだらう。八月十五夜の名月は敦賀の浦で見ることにして福井を出立しようとする、等裁が案内する。着物の裾をおかしな恰好にかけたこの愉快な老友と、武生、今庄を経て十六里の野道、山道を二日たどり、敦賀の宿に着いたのは八月十四日(陽暦九月二十七日)の暮れがた。夜空は晴れて、いい月が出ていた。

そのあとが面白い。宿屋出雲屋の主に芭蕉は「あしたの晩もこんないい月でしようかね」と尋ねた。大詩人としてはなんと陳腐な質問だらう。これに対し主も「なにしろ北陸路のお天気ですからね。晴れるか曇るかわかりようもありませんよ」との当然の答え。月が好き日本人なら、たった今でも、ホテルのフロントあたりで交わしそうな問答ではないか。「おくのほそ道」が意外に私たちに身近なゆえんだ。

それなら今夜のうちに、と、宿の主のすすめる酒一献の後、さっそく氣比神宮に参拝に出かけた。境内の松林に白々と月の光が射し入り、社頭の白砂は月に照らされて、まさに白楽天の詩に言うとおり「霜を敷けるがごとし」であった。宿の主の説明によると、この神前の真砂は、一遍上人の後を嗣いで遊行二世となつた他阿上人が、境内整地の大作業の後に海岸からかついで運んだものだといふ。いまも遊行上人の回礼のあるたびにこの砂持の神事はつづけられているといふ。これを聞けば、氣比の御社はひとしお神々しくまた清々しく感じられて、「月清し遊行のもてる砂の上」なんと簡素で敬虔な、密度高くて映像鮮明な一句であろう。この後の「北国日和定なき」は宿主との会話そのままの軽み。雨の仲秋名月の翌日は秋晴れの一日、芭蕉は等裁とともに、回船問屋の俳人の男が提供してくれた舟で、敦賀半島の色の浜まで贅沢な運出をした。「奥」への旅路最後の、心やすく舟遊びだった。

月明の神前にぬかづく

鎌倉中期に書かれた「とはすがたり」は、後深草院御所の女房であった典侍二条が、宮庭での恋愛と出家後の旅の出来事などを綴った日記です。

村上源氏の家にも生まれた二条は院御所を退出後、諸国行脚の旅に出ますが、氏神である石清水八幡宮(八幡市)を篤く信仰し、奈良よりの帰途には石清水に詣でました。

巻五に「正月の頃より奈良に待しが、(中略)例の猪鼻より参れば、馬場殿開きたるにも、過ぎにし事思ひ出でられて」という個所があります。この「猪鼻(猪鼻坂)」とは、男山の東側から本宮へ向かう途中の急峻な坂道のことです。かつては八幡八景のひとつ「猪鼻坂の雨」として知られた古道でしたが、今は竹林に埋もれて消えてしまっています。

古い境内図には、猪鼻坂を上がった所に橋が描かれていて、その前には僧坊が建ち並んでいます。僧坊跡のひとつは、現在見晴らしのよい展望台になっています。

猪鼻坂を登った二条は、風が吹き抜けるこの山頂付近から遠くに見える比叡山や都の景色を眺めながら、都に帰ってきた安堵感と共に、来し方の出来事を思い浮かべたことでしょう。

(NPO法人・都草 大田 友紀子)



石清水八幡宮がある男山。手前は木津川(八幡市)

文学ウォーク

古典文学・文化を広めようと、古典の日推進委員会は11月1日を「古典の日」と定めた。

工芸の世界で生き続ける魂

古典と聴くと私の少年時代が甦る。それは小学校は御室、中学校は双ヶ丘、高校は嵯峨野という

古典と私

古典の原点に育ったが、恵まれた環境にあつても、古典は勉強という捉え方しか出来なかつた。当時硬派だった私は、

京友禅伝統工芸士 田畑 喜八 さん



男女の愛憎を描く源氏物語よりも、歯切れの良い枕草子や徒然草が好きだった。一昨年の「源氏物語十年紀」でその記念作を制作する機会を与えられ、古希を過ぎた私は

苦勞して源氏物語を再見し、これは大変な世界が表現されていると、若い時の抵抗から脱皮出来た。と同時に、わが国の春夏秋冬・自然界が一番の教科書であると再認識したものである。

ここに一領の江戸時代中期の友禅染小袖がある。この小袖には松竹梅の吉祥文様の上部に、和漢朗詠集の一部が染出されている。これはほんの一例であるが、古典を想

起させる文様が過去の小袖類にも多く見られ、染織の世界にも古典が親しまれていた事がわかる。日本の伝統工芸世界に古典は生き続け、技術技法や表現された内容の背後に潜む作者の魂までも、長い時代を経て私達に栄養を与え続け、京都、日本文化の根源を支え続けている。「氣韻生動」これは多くの古典から得られた私の宝物である。

親しむ

瓦志納

国宝御影堂に貴方のお名前を残しませんか

《国宝御影堂大修理 瓦志納のお誘い》

法然上人の800年大遠忌にあたり、平成31年完成予定で国宝御影堂の修理工事に着手いたします。知恩院では信仰の文化を後世に残していくために、御影堂の瓦志納へのご協力をお願いしています。



いま報恩のとき

元祖法然上人800年大遠忌
平成23年(2011年)3月27日~4月25日

2011年は、法然上人が亡くなられて800年。知恩院ではこの節目の年に、法然上人800年大遠忌(おんき)を盛大におつとめいたします。皆様どうぞご参詣ください。

浄土宗 知恩院

●ご志納は現金書留にて連絡先を明記の上、下記までお送りください。
●送付先/松本山知恩院 瓦志納 係
〒605-8686 京都市東山区林下町400
TEL.075-631-1228

■ご志納金10,000円(一口)
■ご志納を御影堂屋根瓦に記名いたします。
■ご志納頂きますと記念品と受納書をお送りします。
■お願ひまで1ヵ月程お時間を頂戴しております。
■知恩院境内瓦志納所でもご志納を賜っております。